1. ファッションの歴史について

ファッションの歴史を洋装に焦点を当てて紐解いていくと、約 150 年前にさかのぼることができます。1876 年の廃刀令により男性は断髪、洋装化が特に制服によって普及しました。1883 年に建てられた鹿鳴館での女性の洋装は、スカートを膨らませ、ウェストを細く見せるためにコルセットで締め付けた装いが多く「男性の寵愛を受けるために西洋から取り入れられた最新のファッション」(今井 2007:124 参照)という見解もあります。それゆえ、この装いは女性の身体だけではなく生き方も束縛するものだったといえるでしょう。20 世紀に入っても S 字ラインと呼ばれるバストとヒップを突出させるシルエットは女性ファッションの象徴的デザインでした。しかし、第一次世界大戦で男性が戦場に駆り出されたため女性が社会進出し、フランスのシャネルは働く女性、若い女性たちの為にパンツスタイルや動きやすい素材(ジャージーやツィード)を用いた服飾を提案しました。

日本でも、平塚らいてうらが和装から断髪・パンツスーツ姿で女性参政権運動のため全国各地を講演し、装いの変化は女性の活躍を視覚的に示すものとなりました。第二次世界大戦を経て、再び女性らしいシルエットが提案されましたが、女性の身体を拘束するものではなく、動きやすいデザインや縫製へと進化したものでした。一方、男性の装いも戦後の混乱が落ち着きだしてから、若者中心にアメリカのファッションや映画の中の俳優の服装が流行りました。女性も男性も何を着るか、何を着たいかなど、身にまとう物を選ぶことが自由な時代になっていきました。

しかし、ファッション誌、学校や企業等の制服は、今もなお性別によって分かれています。

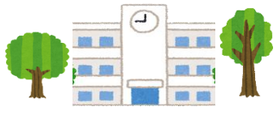
次に、女性と男性に装いが分けられることを機能面から見てみましょう。

2. 働く場での装いの機能面について

工場や作業労働の現場では、女性も男性も同じデザインの作業着や作業靴、帽子、ゴーグルなどを着用しています。これは、安全面から当然のことです。安全性や働きやすさが求められる仕事の現場においては、性差に分け隔てはありません。一方、オフィスワークの現場では、女性はヒールのある靴、男性はネクタイ着用、という働きやすさや機能面から離れた装いが、儀礼や社会通念という観点から必要とされてきました。女性にとって、ヒール靴の着用が苦痛で不利益をもたらすことは「#KuToo 運動」(イギリスでは 2015、日本では 2019 年)によって知ることとなりました。男性のネクタイ着用もクールビズ(2005 年環境省による呼びかけより)によって少しずつ改善されてきています。快適に働くためにも、ジェンダーにとらわれない装いは必然といえるでしょう。

3. 学校制服について(馬場 2018 参照)

第二次世界大戦後、現在の学校制服の基盤が作られ、当時の経済発展最優先主義を反映し、男子には詰襟黒服の「凛々しさ、たくましさ、規律ある、まじめさ」、女子のセーラー服は「可憐・清楚」のイメージによって社会における性別役割や求められる人間像を象徴していたという論もあります。現代においても制服は「女らしさ」「男らしさ」と結びついて意識されています。しかし、学校の制服においては、近年「ジェンダーレス」と呼ばれる女子でも男子でも着用できるハーフパンツやスラックスを選択できる学校が増えてきています。性による制服の区別が多様な性自認への対応を難しくしていることに社会が気づき始め、改革へと動き始めていると言えます。



4. 自分らしいファッション

例えば、会社に行くとき、面接を受けるとき、授業参観、冠婚葬祭などの服装を選ぶとき、無意識のうちに頭の中に刷り込まれた「らしさ」(女らしさ、男らしさ、女はこうあるべき、男はこうあるべき)や、他者からの視線に影響されているのではないでしょうか。

「アイデンティティを形成することは大きな心の葛藤を伴う。なぜなら、アイデンティティが『自己意識』と『他者からの承認としてのアイデンティティ』には、概ねずれが生じる可能性が高いからである。」(高田 2013:5)とあるように、自分らしくあることと他者からの承認を得ることには、ずれがあります。しかし、ファッションを楽しむことは、アイデンティティを表現することであり、「自分がどうありたいのか」を大切にすることではないでしょうか。

コラム1「ルッキズム」　外見によって人や自分自身を評価したり、差別する考え方を「ルッキズム=外見至上主義」といいます。雑誌やテレビ・様々なメディアをとおして、社会的に美しさの基準が作られていて、それを内面化してしまい、自分の外見で悩んでしまう人もいます。

5. 垣根を超えたファッション

有名ブランドやアパレル各社は相次いで「男女兼用」のアイテムを発表しています。3で述べたように学校では「ジェンダーレス制服」や、男女共通のデザインの水着(長袖の上着にハーフパンツが付いたようなデザイン)が普及しつつあります。

性別の固定観念を取り払ったジェンダーレスの装いは自分らしいコーディネートを楽しむのが特徴です。女性向け男性向けでなく、すべてのアイテムの中から選べるので、これまでとは違った雰囲気の着こなしができます。

また、ジェンダーレスカラーを採用した商品が人気です。これまで女性向け商品はピンクや赤など明るい色味が中心であったのに対し、男性向け商品は黒や青などモノトーンや寒色系が中心でした。しかし最近では「女性向け」「男性向け」と限定されにくい、イエローやグリーン、グレー、ベージュなどのジェンダーレスカラーを採用した商品(例えばスキンケアやコスメのパッケージ、ランドセルなど)が増えています。

ジェンダーレスファッションやジェンダーレスカラーを楽しむ人が増えている背景には、性別間の平等を求める意識の広がりや、多様性を重んじる考え方の広がりなど、性別にリンクする服装に違和感を覚える人が増えたことにも要因があるのではないでしょうか。

コラム2「ユニバーサルファッション」　障害があっても、高齢になり体形の変化や身体が不自由になっても、誰でも自由におしゃれなファッションを楽しめるようにする取り組みのことです。

まとめ

着るものには、まとう人の好みや個性が表現されます。一方、制服や儀礼の場などで決められた衣装を身にまとうことは、制度や伝統という枠組みの中で位置づけられた“性別”に、何等かの意義が付け加えられていると捉える視点も大事です。しかし、ファッションが自己表現の手段として社会に浸透してきている以上、一人ひとりの個性を大切にしていくことは、ますます重要になってくるでしょう。何を着ても、どう着ても、攻撃的であったり人を傷つけないことなど、ひろい意味での“ドレスコード”が社会に浸透することが望まれます。今回は、ファッションをテーマに、ジェンダーとの関わりを考えてみました。“明日、何を着よう”と考えることは、生きる力になるかもしれません。自分らしい服を身にまとう事、それは自分を表現することで、ジェンダーに縛られず自由な気持ちを表すことと言えるでしょう。

【参考文献・URL】

蘆田裕史、藤嶋陽子、宮脇千絵(2022)「ファッションスタディーズ」フィルムアート

今井啓子(2007)「ファッションのチカラ」筑摩書房

城一夫、渡辺直樹(2008)「日本のファッション　明治・対象・昭和・平成」清玄舎

高田葉子(2013)「アイデンティティとファッションの関連性についての考察」(戸板女子短期大学研究年報　第 56 号、pp.3-13)
file:///C:/Users/user01.PBFLAT02/Downloads/KJ00009099839%20(1).pdf

馬場まみ(2018)「ジェンダーの視点からみた学校制服の課題―女性差別撤廃条約の理念を 軸として―」『日本衣服学　会誌』　Vol.62 No.1, pp.9-14

日置久子(2006)「女性の服飾文化史」西村書店